



筑紫女学園大学リポジト

明治期遣波使節団員古川宣誉の観たペルシアのフローラ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/80

明治期遣波使節団員古川宣誉の観たペルシアのフローラ

大津 忠彦

Flora in Persia Observed by Captain Furukawa during His Journey in 1880 - 81

Tadahiko OHTSU

はじめに

筆者は、みずからの主たる研究フィールドとしてイランをその対象地としていることに関連して、当該地を実見、踏査した先覚者たちの事績にはこれまで様々な角度から関心を抱き、再評価してきた⁽¹⁾。それは、考古学資料（遺跡、遺物）に関する先行研究成果情報が不可欠であることからばかりではなく、研究史、学史的な内容理解に注視すればするほど、時々現地踏査成果に盛り込まれた諸事象が、課題解決への端緒、換言すれば新たな視座をも提供しているように筆者自身には理解されるからである。先人たちが何を、どこで観察し、どのように感得したかについての記録・伝聞は、考古学資料自体の考究にとってのみならず、外国考古学に求められるべき広い文化理解に資するはずと思われる。

今回は、1880（明治13）年の遣波使節団（吉田正春ら）一行が、「ペルシア領土に上陸して先ず実見・体感した事項が如何であったかと共に、何を礎、拠り所に、すなわち「予備知識」として未体験の激務遂行にたずさわりの得たのか⁽²⁾」について、古川宣誉著『波斯紀行』（1891年）を端緒に試論してみた。遣波使節団一行は、品川（東京）抜錨以来85日間の航行後、ペルシア湾奥の港市ブーシェフル（古川宣誉の表記は「ブーシール」）に6月29日「午後三時衆と俱に上陸」（151頁）を果たす。そして7月25日にテヘラーン（古川宣誉の表記はテヘラン）をめざし出立するまでに、在ブーシェフルにおいて一行が見聞・体験した様子、たとえば受忍限界を凌駕する彼の地の酷熱、さらには汚辱さについての細やかな記録字面などを、爾後の道中記に照らして、筆者は「テヘラーンまでの刻苦陸行に備えるべきいわば「ならし」期間と読み取った。古川の記録によれば、たしかに一行は、7月25日ブーシェフル出立の後9月10日「テヘラン府入」に至るまでの

途次、各処で厳しい炎暑、山間部標高差に伴う過酷な気温変動、宿所の不快、現地食への不慣れ等々に悩まされ続けたのである：

■行程凡百九十六「フ、ルサク」凡我邦三百里ナリ（中略）時恰モ酷暑ニ際シタレハ概ネ行クニ夜ヲ以テシ或ハ暗ヲ衝テ萬仞ノ陰崖ヲ犯シ渺茫タル沙漠ニ迷ヒ或ハ徹夜馬上ニ仮寐シ山間ニ飢餓ヲ忍ヒ衣ヲ換ユルコトナク浴スルコトナク千辛萬苦□ニ第蘭ニ入ルヲ得シカ汚穢ノ為ニ発シタル斑腫ヲ憂フルノ外一行皆病ニ罹ルナク不慮ノ難ニ遇フコトナシ是レ尤モ得難キ幸ナリ（205-6頁）

なお、テヘラーンへ至る経路は以下の如く取り纏められている（図1参照。表記は原典のままカッコ内は図1の表記法。地名間の隔たりはキロメートル値に換算）：

ブーシール（ブーシエル）-48km-ボラジューン-24km-ダルキー-24km-コナルタクテ-48km-カザルン（カザルーン）-30km-ミヤンコタル-18km-ダスタルジャン-18km-カナゼヌーン-36km-チナラダール-18km-シラツ府（シーラーズ）-30km-ゼルガーン-36km-タクテタウス-36km-カマババード-36km-モルガープ-24km-ホーネキヤルガーン-24km-デービッド-30km-カニコーラ-42km-スルメック-24km-アバデー（アバデ）-30km-シュエルギスタン-36km-エツチカスト-18km-アマナバッド-18km-マースードバグ-24km-クムシャ-30km-マイヨール-36km-マルク-18km-イスパハン府（エスファハーン）-24km-ギャーズ-36km-ムルシヤハ-18km-ビデシ-12km-スー-30km-コフルート-42km-カシャーン（カーシャーン）-36km-センセン-42km-ボサンゴーン-24km-クーム（コム）-24km-ポリダラク-36km-ホーズソルトン-42km-ケナールギェルド-18km-コホリザック-18km-第蘭府（テヘラン）



図1. イラン地図（□で囲んだ地は主要経路・滞在処）

明治政府初の西アジア訪問団としての矜持とでもいうべきか、苦境・苦悩のなかであってなお

任務遂行上の観察眼に隙はなく四周を捉えている。その証のひとつが地勢そして植生への注視と記録であろう。

I. 『波斯紀行』の観察眼

筆者はこれまでに、古川宣誉著『波斯紀行』が古代遺跡をどのように映しとっているのかについて関係箇所を検索検討したことがある⁽³⁾。たとえばシーラーズ近郊のナグシェ・ラジャブ遺跡、ナグシェ・ロスタムおよびアケメネス朝ペルシア諸王墓遺構、ペルセポリス（タフテ・ジャムシード）、イスタフル遺跡については、使節団長吉田正春による『回疆探險波斯之旅』（1894年）の記載と相俟って、かなりの臨場感をもって一行の観察眼から当時の遺跡の模様を効果的に把握・再現できると理解した。これが叶うのはかつて指摘したように、『波斯紀行』が、特にその「日誌之部」において、「基本的には「時系列」的に坦然と記述が進行されているから⁽⁴⁾」に他ならない。

この確かな観察眼は、軍属身分からの専門分野についてのみならず、四周多方面へ向けられて、実見・体認に基づいてカジャール朝ペルシア期当時のイランを活写する貴重な記録集の態をなしているのである。幾度となく再読すると、初めての訪問地ゆえの驚き、畏怖とともに、経験によって既に身に着いた知識の援用による冷静な観察眼の対象になっている記載事項を各所に見出すことができる。そのひとつが「植物相（flora）」に関する時々の描述である。旅程中、概して荒漠とした自然環境の下に身を置き、きつと使命感ゆえに身構え、疲れ、不安を覚えたであろうなかであって、しばし目にとまった樹木草花の類は、一行のささやかな慰みになったようである。

それらは「日本にも有る」、「日本にも有るが、かなり異なる」等々という受け止め方となって、『波斯紀行』に記されている。本務遂行あるいは軍属身分上の本来的関心事に比すれば、優先順位的にはその重要性を小とも考えられる植物相への観察眼は、しかし、1980年当時というだけでも個人的には感興を禁じ得ないのである。対象物によっては、あるいは観察眼に誤謬があるかもしれない、また極めて個人的かつ不十分な観察記録の域を出ていないものもあるかもしれない。しかし、日本人が1880-81年に、ペルシアの地で初めて実見し、時には食した当地の植物相の記録内容として、『波斯紀行』に即してこれらを辿ることにする。

なお、底本としての閲覧資料は『波斯紀行』（古川1891年、国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/988963>より）であり、本論中のページ表記はこれに拠ったことを意味する。原文中のいわゆる「合略仮名」は現代表記にし、判読不詳文字は“□”とした。

II. 『波斯紀行』「事情之部」〈貿易物産〉より

『波斯紀行』（全320頁）は、前半の「事情之部」と後半の「日誌之部」の二部から構成されている。

分量（頁数）は双方ほぼかわらない。前半の「事情之部」には、目次によれば、「地理」、「人口」、「気候 風土病」、「略史」、「王室」、「政体」、「法律」、「教法」、「歳入租税」、「教育」、「陸軍」、「海軍」、「貿易物産」、「道路運輸」、「電信」、「郵便」、「貨幣」、「度量権衡」、「曆法概略」のそれぞれの項目が含まれる。これらのうち、「貿易物産」の記載内容中に、ここでとりあげようとしているフローラ（植物相）について、後半の「日誌之部」に比べれば簡単な記載（それは一部食品にも関わる）を見出すことができる。すなわち、該当箇所を抜粋すると、下記の通りである（冒頭カッコ内は掲載ページ、太字表記は引用者に由る）：

■（94頁）生絲及絹 生絲絹類ハギラン州ニ於テ多ク之ヲ製造ス是レ其地膏腴ニシテ樹木從テ生育シ易ク桑樹モ此ニ栽培スルニ因ルナリ此地ノ桑樹ハ我邦ノ所謂ル刈桑⁽⁵⁾ニシテ最モ善ク暢茂スルヲ見ル然レドモ其産絲ハ（後略）

■（96頁）茶 茶ハ國人之ヲ嗜ムト雖ドモ内國ニ産セズ全ク我邦ノ輸入ヲ仰ク但シ緑茶ハ一切之ヲ用ユルコトナシ（傍点は引用者）

■（96頁）鴉片 鴉片ハシラツ、イスパハン近傍ニ於テ多ク罌粟花ヲ栽培シ之ヲ製造シ以テ印度ニ輸出ス歐洲人ノイスパハンニ在ル者自宅ニ傭夫ヲ置キ多ク之ヲ製造スルヲ見タリ頗ル□利アリト云フ

■（97頁）波斯棗 此棗ハ英人之ヲ「デート」ト云ヒ我邦及支那ノ所謂ル棗子ニ非ス其樹ハ宛然椰子檳榔ニ類シ其實ハ直径四五分長サ八九分許稍檳榔ニ似テ橢圓円形ヲ成シ葉間ヨリ垂ル所ノ長莖ニ結ヒ累々トシテ葡萄ノ如ク其未タ熟セサルニ方テヤ色青ク八月ニ至レハ稍熟シテ黄色ニ変シ終ニ百七十度已上ノ熱ニ触ルレハ真紅色ヲ発スルニ至ル是レ九月ノ交ニシテ是ヲ成熟ノ期トナス味少ク渋リ而シテ甜シ土人皆之ヲ乾シ亞刺伯印度等ニ輸出ス此樹ハ多ク波斯湾海岸ニ栽培ス

■（97頁）葡萄及酒 葡萄ハ第蘭 イスパハン其他各地ニ多シト雖ドモシラツ近傍ニ栽培スル者ヲ以テ最佳トシ之ヲ以テ酒ヲ醸ス名ケテ「シャループ」ト云フ最モ醇ナリ此葡萄ハ其栽培法我邦ノ如クナラス毎年其蔓ヲ芟ルヲ以テ木ノ長サ僅ニ三尺満タス恰モ我邦ノ所謂ル刈桑ノ如ク葉間ニ累々實ヲ垂レ其 實一毬ノ数九十顆ニ前後ス而シテ其熟スル者モ青色ヲ変スルコトナク終ニ紫玉香露ヲ滴ラスニ至ラス然レドモ其味尤甘美ニシテ且核ナク頗ル佳種ナリ又酒ハ此外ニ「アラック」ト號スル者アリ「シャループ」酒或ハ波斯棗ヲ以テ製造ス又「シャルベット」ト號スル者アリ橙水ノ種類ニシテ之ヲ水ニ和シ且ツ此國ニテ製スル薔薇水ニ三滴ヲ加ヘ之ヲ飲メハ其味甘クシテ香気アリ尤夏季ノ飲料ニ適ス

『波斯紀行』後半の「日誌之部」記載事項と相照合すると、「事情之部」の「貿易物産」の条項

に見出されるこれらペルシアの「桑」、「茶」（当時は自国産品なし）、「罌粟花」、「波斯棗」、「葡萄」が、いずれも当時商品価値の高い「有用栽培植物」とでも称すべきものの例として記載されていることがわかる。すなわち桑樹は養蚕、製糸業用必需農産品として、茶は喫茶の国民的習慣を満たす飲用農産品として、罌粟花（ケシ）は鴉片（アヘン）製造用の原料植物として、波斯棗（ナツメヤシ）は国内消費用および輸出用農産品として、葡萄はブドウ酒製造用としてのそれぞれの観点から「事情之部」に選ばれたらしい。すなわち、カジャール朝ペルシアの国情が、貿易相手国として相応しいか否かに関して、古川が農業分野における報告該当対象品に選定したとみなすことができるかもしれない。したがって、「日誌之部」においては路傍の草木をも含めて多様なフローラに関しての記載があることと様相を異にしている。前半の「事情之部」中に言及のこれら「桑」、「茶」、「罌粟花」、「波斯棗」、「葡萄」は「貿易物産」品のうちに論じられていることから分かるように、国情報告という使命遂行の調査対象品として論じられている。これは「日誌之部」に言及のフローラとその描述が、時として私情を交えての観察表現となっていることは異なるところである。まずは、これら「貿易物産」としての有用栽培植物とされたそれぞれについて、後半の「日誌之部」に見出される観察の具体例を集成しておきたい（引用文末のカッコ内は日誌記載の日付および該当頁、引用文中の太字表記は引用者に由る）。

Ⅲ. 「貿易物産」としての有用栽培植物：桑、茶、罌粟花、波斯棗、葡萄

① 桑

テヘラーンへの途次、シーラーズで先ず目撃される：

■シラツ府ニ入り（中略）此花園ハ方二三丁四面□壁ヲ繞ラシ赤松、杏、楓、柘榴、柳、桑、地膚草、欵冬、菊、薔薇、金仙花、射干、葵等ノ草木ヲ培養シ頗ル爽快ニシテ恰モ我邦ノ花園ニ入りタル念ヲ為ス熱地ニ入りシヨリ始メテ此好景ヲ見ルヲ得タリ（8月2日（月曜）175-7頁）

また、テヘラーンにて国王拝謁の任を終えカスピ海より帰路をとるため、アルボルズ山脈を越えて「ロスタマバッド」へ至る（1981年1月4日）。この翌日、「ギラン州ノ首府」（237頁）「レシット」をめざす途次に目撃する：

■又稲田アリ已ニ収穫ノ後ナリト雖ドモ其根株ノ存スルアリ（中略）又間、林中ヲ開墾シテ桑樹ヲ栽ユ果シテ養蚕ノ料ナル可シ余輩ハ此好風景ノ間ニ進行シ午後一時三十五分コドームノ駅館ニ入ル行程五「フ、ルサク」⁽⁶⁾ト云フ（1月5日（水曜）236-7頁）

② 茶

茶の樹そのものについての記録はない。このことは、前出の「内國ニ産セス全ク我邦ノ輸入ヲ仰ク」と呼応する。しかしながら、例えばテヘラーンへ出発する以前のブーシェフル（「ブーシェール」）滞在中（7月12日、月曜）に、公人宅訪問時の供応状況から、当時コーヒーと共に「茶」

の存在の重要性がうかがわれる：

■通常応答ノ後棗椰子醸造ノ「シャルベット」橙酸ノ如クニシテ甘シ口中ノ粘液ヲ去ルニ妙ナリ
次ニ茶次ニ珈琲ヲ薦ム此三品ハ波斯ノ風習トシテ必ス賓客ニ供スル者トス（160頁）

また、シーラーズでの要人との会談の様態を記す件からは、ペルシアにおける茶の事情の一端を覗き知ることできる⁽⁷⁾：

■総督ハ現今国王ノ叔父ニシテ名ヲハジ、モタメ、エ、デ、ドーラ、ファラハード、ミルザト称シ
齡古稀前後ナル可ク（中略）種々ノ談話アリ或ハ我邦ノ景況ヲ問ヒ或ハ茶ヲ栽ユルノ法ヲ質シ
遂ニ我邦ヨリ農夫ヲ雇ヒ耕作ヲ学ハント欲スル等ノ談アリ（中略）座間「シャルベット」、茶、
珈琲ヲ供ス其茶托ハ殆ト玻璃製ノ酒盃ニ似タリ（179頁）

③ 罌粟花（ケシ）

「事情之部」には前記のようなシーラーズ（「シラツ」）、イスファハーン（「イスパハン」）近傍での栽培云々が記されているが、「日誌之部」において、8月2日（月曜日）シーラーズから8月11日（水曜日）シーラーズ出立までの期間およびその前後の記録に「罌粟花」は見られない。イスファハーン（8月23～27日およびその前後）に関しても同様に特記されていない。ただし、「日誌之部」8月2日（月曜）記載中に多種類の植物名が見出されることは、「事情之部」の記すところを補強しているとみてよいかもしれない：

■シラツ府ニ入り（中略）此花園ハ方二三丁四面□壁ヲ繞ラシ赤松、杏、楓、柘榴、柳、桑、地膚草、欵冬、菊、薔薇、金仙花、射干、葵等ノ草木ヲ培養シ頗ル爽快ニシテ恰モ我邦ノ花園ニ入りタル念ヲ為ス熱地ニ入りシヨリ始メテ此好景ヲ見ルヲ得タリ（8月2日（月曜）175-7頁）

④ 「波斯棗」

これはナツメヤシのことである。これが酒（「アラック」）の原料との記載もある：

■酒ハ此外ニ「アラック」ト號スル者アリ「シャラーブ」酒或ハ波斯棗ヲ以テ製造ス（97頁）

樹木としての観察は三個所見出される：

■午前一時リングガ港ニ着スバンダラアバスヨリ一百零八海里ト云フ此地亦港湾ニ瀕シタル市街ニシテ戸数千四五百アリ市街ノ近傍数所ニ棗林ヲ見ル不毛地中ノ美地ナリ（6月28日（月曜）150頁）

■午前四時前面ノ山早ク曙色ヲ呈シ山麓ニ数株ノ樹木ヲ見ル路上亦少許ノ火田アリ此ニ葡萄数粒ヲ得テ僅ニ渴ト飢トヲ醫シ午前六時一小村ヲ過ク棗椰子ヲ栽ユル甚多シ（中略）ボラジューンノ隊商舎ニ入ルヲ得タリプーシールヲ距ル凡八「フ、ルサク」ト云フ「フ、ルサク」ハ凡我一里半ナリ（7月26日（月曜）166頁）

■午前七時半カザルン府外ニ達シ一大樹園ニ入り空屋ニ休憩ス此地海面上二千七百五十尺ノ高サニシテコナルタクテヨリ行程八「フ、ルサク」ト云フ此樹園ハ方三四丁許ニシテ柘榴、棗椰

子等ヲ栽種セリ（7月29日（水曜）172頁）

⑤ 葡萄

使節団一行のペルシア到着時の時季とも関連しているのであろうか、ブドウについての記載は比較的多く散見される：

■葡萄ハ此地方ノ名産ニシテシラツノ産ヲ尤モ佳トス其價極メテ廉ニシテ渴ヲ止ムル尤モ妙ナリ而シテ其色青ク形チ圓ニシテ核少シ紫玉香露ヲ滴ラス者ト全ク其種ヲ異ニセリ（7月7日（水曜）157-8頁）

■午前四時全面ノ山早ク曙色ヲ呈シ山麓ニ数株ノ樹木ヲ見ル路上亦少許ノ火田アリ此ニ葡萄数粒ヲ得テ僅ニ渴ト飢トヲ醫シ午前六時一小村ヲ過ク棗椰子ヲ栽ユル甚多シ（中略）ボラジューンノ隊商舎ニ入ルヲ得タリブーシールヲ距ル凡八「フ、ハルサック」ト云フ（7月26日（月曜）166頁）

■チナダールノ北方一「フ、ハルサック」許ノ地ニ（中略）山ニ傍フテ行クコト殆ト一「フ、ハルサック」一小村ヲ得タリ（中略）其村ニ憩フ少時ニシテ驢ヲ雇フテ騎シ又隊商舎ニ帰ル此途上山麓其他ニ火田アリ小土壁ヲ繞ラシテ人ノ入ルヲ防ク其栽ユル所ノ者ヲ看ルニ茶或ハ桑樹ノ如ク比々皆團ヲ成セリ之ヲ諦観スレハ即チ葡萄ニシテ其高キモ三尺ニ滿タス小ナルハ僅ニ一尺余ニ過キス葉下ニ實ヲ結ヒ地上ニ垂ル其實一^{フサ}穂九十粒前後ヲ着ク核ナクシテ味美ナリ是レ「シャラープ」波国ノ葡萄酒ナリヲ釀スノ用ニ供スト云フ葡萄ヲ栽培スルハ此ノ如ク多シト雖ドモ其他ノ耕作ハ一モ著手セズ平原茫々トシテ唯荆棘ノ蔓延スルノミ（8月2日（月曜）175-7頁）

Ⅲ.『波斯紀行』「日誌之部」に見出される植物

前述のように『波斯紀行』「事情之部」＜貿易物産＞に記載された植物のうち実見されたものは、クワ、ケシ、ナツメヤシ、ブドウの4種だけである（茶樹は無し）。いずれも商品価値の高い草木である。つぎに、これら以外の植物記載事例を『波斯紀行』後半の「日誌之部」に見出してみる。

i. 木本植物の類（含、花木）

⑥ 柘榴

樹木として先ず注視されるのはザクロである。これは調味料原材料のひとつとしても理解されている：

■其色黒ク味噌ニ水ヲ和シタルカ如キ醬アリ是レ柘榴ト胡桃トヲ以テ釀シタル者ニシテ酸味ヲ帯ヒテ美ナリ（7月24日（土曜）164-5頁）

ザクロの木としての記述は以下の如くである：

■午前七時半カザルン府外ニ達シ一大樹園ニ入り空屋ニ休憩ス此地海面上二千七百五十尺ノ高サニシテコナルタクテヨリ行程八「フ、ハルサック」ト云フ此樹園ハ方三四丁許ニシテ柘榴、棗椰

子等ヲ栽種セリ（7月29日（水曜）172頁）

- シラツ府ニ入り（中略）此花園ハ方二三丁四面□壁ヲ繞ラシ赤松、杏、楓、柘榴、柳、桑、地膚草、欵冬、菊、薔薇、金仙花、射干、葵等ノ草木ヲ培養シ頗ル爽快ニシテ恰モ我邦ノ花園ニ入りタル念ヲ為ス熱地ニ入りシヨリ始メテ此好景ヲ見ルヲ得タリ（8月2日（月曜）175-7頁）

⑦ 胡桃

ザクロと併用されて調味料成分のひとつを成すこと（前記）のほか、クルミの木として次のように記載されている：

- 午前十時十四分コフルートヲ発ス此地ハ連山ノ中腹ニ在リ溪澗ニ臨ミタル山村ニシテ菓樹ヲ栽ユル極メテ多ク胡桃ノ大樹森々トシテ天ヲ摩ス（8月31日（火曜）198頁）

ザクロ、クルミのほか、樹木としてその名前があげられたものには以下の種類がある（引用文中のマル数字は、便宜上引用者が記したもの）：

- 此地（＝カザルン経過後ミヤンコタル到着前、引用者註）馬目壑ニ似タル樹木〔⑧〕甚多ク全地林叢ヲ成ス猶ホ我邦ノ松林ノコトシ（7月29日（水曜）172頁）
- シラツ府ニ入り（中略）此花園ハ方二三丁四面ニ□壁ヲ繞ラシ赤松〔⑨〕、杏〔⑩〕、楓〔⑪〕、柘榴、柳〔⑫〕、桑、地膚草、欵冬、菊、薔薇、金仙花、射干、葵等ノ草木ヲ培養シ頗ル爽快ニシテ恰モ我邦ノ花園ニ入りタル念ヲ為ス熱地ニ入りシヨリ始メテ此好景ヲ見ルヲ得タリ（8月2日（月曜）175-7頁）
- （イスパハンにて、引用者註）古都ノ後宮ナル可シ楼臺ノ四方皆庭園ニシテ多ク楓樹〔⑪〕ヲ栽エ（8月25日（水曜）196頁）
- 午前十時十四分コフルートヲ発ス此地ハ連山ノ中腹ニ在リ溪澗ニ臨ミタル山村ニシテ菓樹ヲ栽ユル極メテ多ク胡桃ノ大樹森々トシテ天ヲ摩ス又林檎〔⑬〕梨〔⑭〕菜〔⑮〕萁〔⑯〕杏〔⑩〕等アリ就中李ノ小ナルカ如キ者〔⑰〕アリ之ヲ食スニ味尤佳ナリ（8月31日（火曜）198頁）
- メンジールノ駅館ニ入ル行程四「フ、ルサク」ト云フ此地大山脉ノ圍ム所ナリト雖ドモ此間ノ一大村ニシテ氣候亦温暖草木皆青ク四時常緑ノ樹多シ其質檜〔⑱〕ニ似タリ地味甚タ佳ニシテ人民ノ麦圃ヲ耕スヲ見ル（中略）ラハマタバッドト号スル村落ニ出ツ此村ハ河ニ沿ヒシ大村ニシテ市店多シ之ヲ過キ又河邊ノ坦傍ヲ行クニ檜樹〔⑱〕都テ林ヲ成シ恰モ本邦ノ田舎間ニ似タリ（1月4日（火曜）235-6頁）
- （「ロスタマバッド」出立後「レシット」への途次、「コドーム」着前、引用者註）満山都テ樹林ニシテ就中櫟〔⑲〕ノ良材最多シ（中略）木葉無ク其ノ何ノ樹タルヲ知ラスト雖ドモ最モ多キ者ハ榛樹〔⑳〕ニシテ其間又緑葉扶踈タルハ皆柘植〔㉑〕ナリ（1月5日（水曜）236-7頁）
- 又園中ニハ満地柑樹〔㉒〕ヲ栽ユ時ニ其實恰モ熟シ枝上ニ累々トシテ貫珠ノ如シ（「エンズリー」にて、1月9日（日曜）241頁）

さらに、花木としてバラ（薔薇）が挙げられる。バラに関しては、今日でもイラン特産優品として名高い「バラ水（薔薇水）」への言及があることも注視すべきであろう：

- シラツ府ニ入り（中略）此花園ハ方二三丁四面□壁ヲ繞ラシ赤松、杏、楓、柘榴、柳、桑、地膚草、欵冬、菊、薔薇[23]、金仙花、射干、葵等ノ草木ヲ培養シ（8月2日（月曜）175-7頁）
- 善ク培養ノ法ヲ盡スニ至テハ林檎、桃、薔薇、菊等ノ類皆能ク繁茂ス（テヘラーンについての記述、229頁）
- 「シャルベット」ト號スル者アリ橙水ノ種類ニシテ之ヲ水ニ和シ且ツ此國ニテ製スル薔薇水ニ三滴ヲ加ヘ之ヲ飲メハ其味甘クシテ香氣アリ尤夏季ノ飲料ニ適ス（「事情之部」97頁）
- 洋商ハ英人蘭人等僅ニ居住ス其貿易ノ輸出品ハ鴉片、雜穀、馬、絨毯、乾菓、薔薇水、乾菓ニシテ輸入品ハ棗椰子、小間物、木材、砂糖、紙、鹽、銅、鉄等ノ類ナリ（「ブーシール」滞留中、6月30日（水曜）153-4頁）

ii. 草木植物の類（除、既出のブドウ）

②4 西瓜

スイカも、前記ブドウ同様、時季柄もあってか記載中に比較的多く散見される：

- 余ハ前記ノ沙磧ヲ進行シ只人馬ノ來往スルト其足跡トニ因テ途ヲ求メ茫渺タル荒景中馬骨ノ散乱シタル間ヲ走りテ稍三英里許ヲ行過シ始メテ少許ノ火田アルノ地ニ至ル此地皆西瓜ヲ栽ユ（中略）西瓜ヲ得テ之ヲ食フ其味極メテ美ナリ蓋シ此國ノ水ハ皆多少鹽分ヲ含有シ淨水ヲ得ル能ハス故ニ西瓜ハ實ニ民間欠ク可ラサルノ物ニシテ務メテ之ヲ培養スル所以ナリ（「ブーシール」滞留中、7月1日（木曜）154-5頁）
- 「バザール」ト稱スル者ニシテ（中略）且ツ蔬菜ノ如キハ僅ニ茄子黃瓜アリ菓物ハ西瓜甜瓜葡萄ヲ見ルノミ葡萄ハ此地方ノ名産ニシテシラツノ産ヲ尤モ佳トス其價極メテ廉ニシテ渴ヲ止ムル尤モ妙ナリ而シテ其色青ク形チ圓ニシテ核少シ紫玉香露ヲ滴ラス者ト全ク其種ヲ異ニセリ（中略）屋ニ上リ諦視スルニ盤上ニ棒砂糖二條西瓜六七枚ヲ載セ燭二基ヲ焚キタル者ヲ二名ニテ（「ブーシール」滞留中、7月7日（水曜）157-8頁）
- ボラジューンノ隊商舎ニ入ルヲ得タリブーシールヲ距ル凡ハ「フ、ルサック」ト云フ（中略）余ハ門側ニ在ル層樓ニ上リ西瓜ヲ喫シ休憩セシニ（7月26日（月曜）166頁）
- 此地ニテ我輩ノ為ニ設ケル所ノ食ハ日々二回ナリト雖ドモ其調製並ニ体裁頗ル鄭重ニシテ（中略）甘味ヲ帶ヒタル汁類四五品西瓜甜瓜葡萄ノ類三四品（「シラツ府」滞留中、8月3日（火曜）177頁）

②5 茄子、②6 黃瓜、②7 南瓜

「蔬菜」（157-8頁）の類として「茄子（ナス）」、「黃瓜（キュウリ）」および「南瓜（カボチャ）」が挙げられている：

- 「バザール」ト稱スル者ニシテ（中略）且ツ蔬菜ノ如キハ僅ニ茄子[25]黃瓜[26]アリ（「ブー

シール」滞留中、7月7日（水曜）157頁）

■モルガープノ驛館ニ入ル（中略）其地麦及瓜等ヲ種ユ（中略）着後南瓜〔27〕及黄瓜少許ヲ得（8月14日（土曜）187-9頁）

⑳ 甜瓜

「菓物」（157-8頁）としては既出のスイカ、ブドウのほか「甜瓜」（メロン、マクワウリ）の記載がある：

■菓物ハ西瓜甜瓜葡萄ヲ見ルノミ（「ブーシール」滞留中「バザール」にて、7月7日（水曜）157頁）

■此地ニテ我輩ノ為ニ設ケル所ノ食ハ日々二回ナリト雖ドモ其調製並ニ体裁頗ル鄭重ニシテ（中略）甘味ヲ帯ヒタル汁類四五品西瓜甜瓜葡萄ノ類三四品（「シラツ府」滞留中、8月3日（火曜）177頁）

■其名ヲ知ラサル木實櫛ノ實ニ似タリト甜瓜トヲ購ヒ（「コホリザック」にて、9月9日（木曜）204頁）

いわゆる「花物」あるいは名称不詳のものとして：

■シラツ府ニ入り（中略）此花園ハ方二三丁四面□壁ヲ繞ラシ赤松、杏、楓、柘榴、柳、桑、地膚草〔29〕、欵冬〔30〕、菊〔31〕、薔薇、金仙花〔32〕、射干〔33〕、葵〔34〕等ノ草木⁽⁸⁾ヲ培養シ（8月2日（月曜）175-7頁）

■眼中唯大小ノ石礫途上ニ散布シ針芒多キ灌木野草其間ニ点綴スルヲ見ルノミ（「ボラジューン」と「ダルキー」との間、7月26日（月曜）166頁）

■盡ク突兀タル巖山ニシテ□然緒禿一樹木ヲ見ス（中略）僅ニ矮樹アルモ降雨ナキヲ以テ木葉盡ク凋落シ唯枯枝ノ巖頭ニ垂ル、アルノミ（「ダルキー」と「コナルタクテ」との間、7月27日（火曜）170頁）

■茫茫タル平野ニシテ一樹ヲ見ス只長ケ一尺余ノ薊多キ瘠草團ヲ成シテ叢生⁽⁹⁾スルノミ（「スルメック」を過ぎ、「アバデー」に至る途次、8月17日（火曜）190頁）

Ⅲ. いわゆる「穀物」の類：ムギ、イネ

㉑ ムギ

■カナゼヌーンニ抵リ隊商舎ニ休憩ス（中略）ダスタルヂャンヨリ三「フ、ルサック」ト云フ（中略）舎後ニ小流アリ水清冽ニシテ飲ムヘシ又近傍民家二三アリ少シク麦ヲ種ルヲ見ル（7月31日（土曜）174-5頁）

■ゼルガンヲ発シ（中略）広漠タル平原ニ出ツ（中略）一望平坦其広サ凡我三四里方ナル可シ之ヲ横断シテ行クコト凡ソニ「フ、ルサック」ニシテ一河流ニ出ツ（中略）橋梁ヲ架ス之ヲ渡リテ行ク又平原アリ此處橋畔少許ノ麦田アリ農民ノ麦ヲ治スルヲ見ルニ麦穂ヲ其幹ト共ニ□碎

シ之ヲ地上ニ堆積シ人其上ニ立チ（後略）（8月12日（木曜）182-3頁）

■午後五時モルガープノ驛館ニ入ル行程六「フ、ルサク」トス（中略）本日行路見ル所只広漠ノ原野ニシテ野民天幕ヲ張りテ住居ス其地麦及瓜等ヲ種ユ（8月14日（土曜）188-9頁）

■メンジールノ驛館ニ入ル（中略）氣候亦温暖草木皆青ク四時常緑ノ樹多シ其質槓ニ似タリ地味甚タ佳ニシテ人民ノ麦圃ヲ耕スヲ見ル（1月4日（火曜）235頁）

■ロスタマバッドの（引用者補記）驛館ヲ発ス是ヨリ已北河流ノ兩岸ニ沿ヒ満山都テ樹林ニシテ就中櫟ノ良材最多シ平地アレハ皆麦圃ニシテ盡ク河岸ニ沿フタル沃土ナリ（1月5日（水曜）236頁）

③⑥ イネ

■ロスタマバッドの（引用者補記）驛館ヲ発ス（中略）密林叢茂ニシテ十歩ノ外ヲ洞視ス可ラス時已ニ木葉無ク其ノ何ノ樹タルヲ知ラスト雖ドモ最モ多キ者ハ榛樹ニシテ其間又緑葉扶踈タルハ皆柘植ナリ（中略）又稲田アリ已ニ収穫ノ後ナリト雖ドモ其根株ノ存スルアリ以テ有年ヲトスルニ足ル（中略）コドームノ驛館ニ入ル（中略）戸ハ都テ櫟ノ良材（中略）忽チ米ヲ得タリ皆大ニ喜ヒ炊テ之ヲ食ス（1月5日（水曜）236-7頁）

IV. まとめにかえて：「波斯事情」（古川宣誉、1881年）より

前記集成の各植物類以外に、具体的名称が明記されないながらも、たとえば「蔓」あるいは蘚苔類についての観察がある：

■樹木叢生シ或ハ蔓草ノ枯枝ニ絡ヒタル者黄葉已ニ落テ唯赤實ヲ結ヒ或ハ石間ヨリ滴下スル清泉ノ傍ニ緑苔露ヲ含テ叢生ス景色全ク一変シテ恰モ我邦内ヲ旅行スルカ如シ（1月5日（水曜）236頁）

この記述は湿潤地ギーラーンに在って、それまで繰り返し体感した南方の乾燥地との顕著な相違を具体的に実感・驚嘆させられる契機になっている点、ペルセポリスにおける観察記に相照らして注視される：

■ペルセポリスノ古宮ニ至ル（中略）石階ヲ上レハ一大宮殿ノ趾アリ大石柱十五其礎五十七合テ七十二基ヲ存ス又壁ノ存スル者ヲ見ルニ皆石造ニシテ（中略）人像文字ヨリ石壁石柱ニ至ルマテ毫モ蘚苔ヲ等々ノ痕跡ナクニ二千三百餘年ヲ経タルモ尚依然トシテ今日彫刻シタル者ノ如シ是レ最モ奇トスヘキナリ（8月13日（金曜）185頁、傍点は引用者）

古川宣誉は、帰国直後、『東京地理学協会報告』（*Journal of the Tokio Geographical Society*）第3巻、第4巻（1881-82年）に、シリーズ「波斯事情」（英文題目は“Persian empire”）を発表した。その第3巻第5号（1881年）所収の第1回は「地理之部」となっており、その後半部は

これまで述べてきた植物相に関する記載の縮刷版とでもいうべき記述内容となっている。長行ながら敢えて該当所をここに留め、爾後の便としたい（下記引用文中の太字表記および二重下線は引用者に由る）。

●又樹木類ハ宣譽ノ經過セシ地方ニ就ヒテ之ヲ見ルニ波斯湾岸ノ地ハ前ニモ記シタル如ク少許ノ棗椰子ヲ栽ユルアリ夫ヨリ「テーラン」ニ至ルノ途上「ミヤンコータル」近傍ノ山中及「コフルート」邊ノ溪間或ハ市府郡村ノ間人煙ノ颯ル所ノ外山野ノ間ニ於テ絶テ之ヲ見ルヲ得ズ只空山曠原漠々寥々トシテ僅ニ荊薊多キ矮草ノ砂礫上ニ點々斑生スルノミ先ツ「ブーシール」ヲ発シ「カザルン」府ニ至レバ柘榴及一種ノ直立伸長ナル木ヲ見ル其幹ノ肌膚ハ柳ノ如クニシテ灰白色ヲナシ枝ハ皆一直ニ天ニ朝シ葉ハ桑ニ似テ小ナリ其叢生スル処ヲ遠ク望メバ宛モ竹林ノ如シ此樹「シラツ」「イスパハン」「テーラン」俱ニ多シ国民ノ木材トシテ用ユル所ノ者ヲ見ルニ皆此樹ナルガ如シ又「ミヤンコータル」邊ニ生ジタル樹木ハ本邦ノ馬目樫ニ似タル者ニシテ數里ノ間ノ山谷皆此一種ノ樹ナリト雖ドモ終ニ喬大ナル者ナク樹性乾縮シテ決テ材ト稱スル能ハズ進ンデ「シラツ」ニ至レバ葡萄ヲ作ル尤多ク樹ニハ檜ノ一種アリ直立伸聳シ遠望ノ景色尤妙ニシテ其間稀ニ松ヲ栽ユルアリ尋デ「イスパハン」ニ至レバ一種本邦ノ楓ニ似テ直立ニ伸長スル大樹多シ「アバス」王ノ頃口ニ作りタル大道ノ如キハ其兩側ニ並栽スルニ皆此樹ヲ以テシ其太キ者ハ直径五六尺ニ達スル者アリ然レドモ其心幹何レモ腐朽シテ洞ヲ為スヲ見ル「テーラン」ニ至ルモ尚此樹ハ必庭園ヲ裝飾スル者ノ一部ヲ為ス但シ「イスパハン」ニ於ケルカ如キ大ナル者ヲ看ズ又「コフルート」ノ溪間ニ於テハ桑及ヒ胡桃ノ大樹多ク之ニ平果茱萸梨杏等ヲ交エ頗ル緑葉ニ富ミタリ然レドモ是皆村民ノ栽培スル所ニ係リ自然ニ生ジタル者ニ非ズ故ニ其地ヲ離ルレバ又青黛ヲ見ルニ由ナシ殊ニ「ホーズソルタン」邊ノ如キハ大砂漠ノ一隅ニシテ矮草ト雖ドモ生育スル能ハズ純然タル真ノ不毛ナリ更ニ進ンデ「テーラン」ニ達スレバ又少シク樹木ヲ見ルト雖ドモ棟梁ノ材ナク只大ナル者ハ「イスパハン」ニ於テ目撃シタル楓ノ一種ノミ其他榆樹アリ枝葉何レモ團圓トシテ一塊ヲ為シ庭砌ノ裝飾ヲ資ク又桑樹ハ今ヨリ五六十年前「モハメッド」師在位ノ頃口養蠶ノ為メ人民ヲ勵マシテ栽培セシメタル由ニテ府内及近村共之ヲ見ル多ク楊柳松樹ノ如キモ折ニ之ヲ栽ユルアリ夫ヨリ「テーラン」ヲ去リ「カズビーン」ニ至レバ林檎甚々多シ皆園圃ノ間ニ種エ實ヲ鬻ゲ生計ヲ助クル者ナリ次ニ「エルボルツ」山ヲ超エ「ギラン」州ニ入レバ爰ニ初メテ鬱然タル森林ヲ見ルヲ得可シ其山谷盡ク樹木ニシテ櫟、槲、柘植、榛等ノ良材夥シク其外雜木具ラザルナク州モ亦百草生育シ沃饒尤稱スルニ足レリ之ヲ概スルニ「エルボルツ」山以南ハ田野ノ間絶テ林樹ナク其以北ニ至レバ森林鬱陶ノ間ニ田園聚落アリト號シテ可ナリ（241-3頁）

（引用文等において、旧字、新字および異体字を取えて混用したところがあることをお断りしたい。）

【註】

1. 大津忠彦 1998年、「ギーラーンを訪れた日本人先覚者たち」、『ギーラーン-緑なすもう一つのイラン-』、中近東文化センター、49-56頁。
1999年、「付記、明治13年ペルシア訪問団員について」、『chashm』no. 83、日本イラン協会、28-34頁。
2007年、「明治期先覚者吉田正春とその事績―「考古学」および「西アジア」の視点より―」、『人間文化研究所年報』第18号、筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所、157-170頁。
2008年、First Travelers to Persia, *Encyclopaedia Iranica* 14-5, Columbia University, pp. 556-558.
2. 大津忠彦 2011年、「明治期遣波使節団員古川宣誉のペルシア体認とその背景」、『人間文化研究所年報』第22号、筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所、223-236頁。
3. 大津2007年（同前）
4. 大津2007年（同前）
5. 「刈桑」：刈取りに便利な低木仕立の桑の意
6. 7月26日（月曜）付日誌（166頁）に「一「フ、ルサク」ハ凡我一里半ナリ」とある。したがって、一「フ、ルサク」は6kmと換算されよう。
7. イランにおける茶の栽培は比較的新しい：「20世紀の初め、カーシェフォルサルタネの尊称で知られるムハンマド・ミールザーがインドからアッサム種の苗木3千本と種子を運び、ギーラーン州のラーヒージャーンで栽培したのがその始まりである。在インドのイラン総領事となって赴任したカーシェフォルサルタネは、赴任にあたって、茶の栽培の研究を王に命じられていたが、当時、茶の栽培はイギリスによって厳しく管理されていたので、フランス人商人であると偽って茶の栽培方法を学んだのである。この功績によって、イランの「茶栽培の父」と呼ばれることとなり、最初のテヘラーン市長に任命された（註1、大津1998年、14-5頁所収）。」
8. 文字通りには㉔地膚草（ジハダソウ）、㉕欸冬（フキノトウ）、㉖菊（キク）、㉗金仙花（キンセンカ）、㉘射干（シャガ）、㉙葵（アオイ）ながら、具体的植物名としては不詳。
9. 俗に言う「ラクダグサ」の意か？

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）

